

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	柯 明
論文題目	近世女性漢詩人原采蘋の漢詩研究―旅の視点から―
審査要旨	<p>本論文は、江戸時代後期の女性漢詩人原采蘋(1798-1859)の漢詩作品を考察し、その特徴を明らかにすると共に、江戸後期に女性漢詩人が采蘋一人ならず輩出された時代背景を検討しつつ、原采蘋の文学的独自性の再評価を試みたものである。筑前秋月藩の儒者の娘に生まれた原采蘋は、幼い頃から漢詩文を学び、28歳で単身郷里を離れてより、ほぼ生涯の大半を旅に過ごしながら、各地の名士と交流する中で多数の漢詩の創作を行った。独身を貫き漢詩人として漂泊の生涯を送った原采蘋の経歴は、早くより郷土史や女性史や伝記研究の分野からは注目されていたが、その漢詩作品自体を文学的な視点から具体的に分析し、文学的特徴や文学史的位置づけを考察したものはほとんどなかった。本論文は原采蘋の漢詩作品を正面から捉えて分析した、初めての総合的な原采蘋研究といえる。</p> <p>本論文は以下の内容から成る。</p> <p>序章においては原采蘋に関する先行研究を整理し、本論者は二つの課題を設定した。第一は従来専ら伝記研究が中心であった原采蘋の漢詩作品に対して文学的考察を加え、特に同時代の女流漢詩人との比較から原采蘋の文学的特徴を明らかにすることであり、第二にはこうした女性漢詩人の創作活動を近世東アジア全体の文化現象として捉え、女性文学者が「旅」をし、「旅」を文学的モチーフに創作を行う実態と意義を考察することで、「旅」の詩人原采蘋誕生の時代的可能性を考察することである。このマイクロとマクロの複眼的課題の提示が、本論文の構想の独自性である。</p> <p>本論は八章から為り、その論点は以下の通りである。</p> <p>第一章は原采蘋および同時期女流漢詩人の経歴を整理し、江戸後期に女流漢詩人が輩出された詩壇の状況を提示した。</p> <p>第二章から第四章は、本論文の核心ともいべき論考で、「旅」の文学主題をもとに、原采蘋の漢詩作品における詩語・詩題・詩想を具体的に分析し、柳絮・萍・蓬など流れ漂うイメージを有する詩語の多様や、舟からの移動する視点の変化、人生の年輪と時間表現の深化など、原采蘋が中国古典の様式的イメージを踏まえつつ、自らの旅の実体験を人生の旅へと重ね合わせて創作に昇華してゆく経緯を明らかにした。また同時期の他の女流漢詩人の花鳥風月を詠じた優美な詩風と一線を画すことを詩語や詩題の傾向分析から明らかにした。</p> <p>第五章は「旅」をテーマとし、旅の実体験を文学創作に注いだ中国清朝の女性詩人鮑之蕙、李氏朝鮮の金錦園を比較し、原采蘋がその詩作・創作態度において自立を志向した、独自性の高い詩人であったことを提示した。</p> <p>第六章と第七章は、女性漢詩人原采蘋が誕生した時代背景を考察したもので、江戸後期における女流漢詩人を育成した家庭環境や交流サロン、出版界の様相などを考察し、第七章では特にその育成者として中国清朝の袁枚と江戸時代の頼山陽を取り上げ、その女性観、女性教育観の新しさと限界について論じた。</p> <p>第八章は、補論という位置づけではあるが、原采蘋の父である原古処の源氏物語を詠んだ連作「読源語五十四首」の掛詞の技法を取り上げ、漢字漢語の日本での訓読みを活用して和歌の掛詞の技法を漢詩に活用するという作詩方法を具体的に分析した。これにより当時の東アジアにおける国際文学ともいべき漢詩が日本において独自の文学的発展の様相を呈していたことを示すと共に、作品の中に娘采蘋への父古処のメッセージが籠められていることにも言及した。</p> <p>そして終章において、以上の考察から、本論文は広く東アジアに目を向けても、旅の詩人原采蘋の経歴や、女性的な優美な詩風と一線を画した漢詩創作、漢詩人としての自立志向の強さなどが独自の個性を有し</p>

ていると結論づけた。

このように本論は、従来なかった多様な論点から原采蘋を総合的に論じたものである。中でも本論の評価しうる点は以下のことが挙げられる。

1. 江戸後期の女流漢詩人として、梁川紅蘭や江馬細香に比べると知名度や評価において些か地味な存在であった原采蘋の作品の独自性を考察し、再評価を加えたこと。
2. 従来もっぱら伝記研究に片よっていた原采蘋の作品について、中国詩歌研究の専門領域から詳細で的確なテキスト分析を行ったこと。特に表現論の面で漢詩における詩語の様式性・象徴性を十分に咀嚼し、前提とした上で、それらの詩語が「旅」のモチーフと結びついて活用された原采蘋の創作の個性や詩風の変化を考察していること。
3. 同時代の東アジアの女性漢詩人を「旅」のモチーフから俯瞰し、同時代の国境を越えた一種の文化現象として捉え、原采蘋の作品をいわば当時の「国際文学であった漢詩」というマクロな視野の中で位置づけようと試みたこと。
4. 原采蘋の文学活動という面のみならず、原采蘋を漢詩人として誕生せしめた江戸後期の文化的背景や女性教育の問題にも目を向けていること。

本論文に対しては、当時の東アジアの女性観について、儒教道德の制約や封建社会の束縛といった表現で捉えるのはステレオタイプではないか、との意見もあったが、それは原采蘋が当時の女性漢詩人として特異といえる生き方をし、その人生が独自の作風に反映されているとの論点を否定するものではない。本論文が従来看過されてきた原采蘋の漢詩人として創作そのものに真摯に向き合い、東アジアに亘る幅広い視野と作品論・伝記研究・社会史など多様な論点から少なからぬ新たな知見を提示したこと、さらに、中国語を第一言語とする論者が、中国文学における詩文研究のアカデミックスキルを十分に活かしつつ、日本の漢文訓読にも習熟し、質の高い達意の日本語で論文を完成させたことは、十分に高く評価されるべきである。

よって、本論文は課程による博士(文学)の学位を授与するにふさわしい論文であると判断する。

公開審査会開催日	2022年1月22日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	岡崎 由美	中国古典小説・戯曲	
審査委員	専修大学・教授/早稲田大学文学学術院・客員教授	松原 朗	中国古典詩文	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	池澤 一郎	日本漢詩	博士(早稲田大学)
審査委員				
審査委員				